

早稲田大学 社会科学部 英語 講評

出題形式	マーク式
試験時間	90分
特徴・その他	大問5題は昨年通り。分量は昨年並み。早稲田大学は問題用紙が11ページであることが多いが、今年度の社会科学部は昨年同様15ページだ。レベルは昨年より英文、選択肢ともやや抽象度が増したので、やや難化と言えそう。読解問題は例年社会科学系のテーマが中心だが、今年度は昆虫と気候変動の関係、新型コロナウイルスがテーマの大問があった。広義の意味では社会科学系だろうが、自然科学系とも言えるので、今後自然科学系のテーマが増えるのかどうか興味深い。下線部の意味を問う問題は例年通り難単語や難熟語を問うものが多かった。類推力が試されると言えるだろう。ただ、正解選択肢も難単語という問題もあったので、お手上げ状態のものも散見された。問題作成者は何を問うているのだろうか？ 社会科学部に特有の推論、infer 問題が今年は出題されず。内容一致問題は相変わらず悩ましかった。どこに書かれているかわかりにくく、本文とは微妙に言っていることが違うなど、正解を絞るのが大変だ。社会科学部は英文量が多く、まさに情報処理能力の速さが問われているとも言えそう。全体として、65%程度が合格最低点か。

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
I	正誤問題	今年度は小問が10で、昨年の9から普段に戻った。ただ、レベルは昨年よりやや難化した。人間科学部もそうだが、動詞に関連した部分が正解のことが多い。今年もその傾向はかなり強かった。正解してほしい部分を指摘しておこう。2は who の後ろが完全文なのでおかしいと感じる。3は The same process が S で appear が V なので三単現の s が必要。数の一致は社会科学部でもよく狙われる文法事項だ。4は outweigh の後ろになぜ by があるのだろうと疑問に思う。8は the canoe capsized near the shore and sink so quickly down to the bottom の and の前後の時制が違う。10は given that S' V' ~ の重要表現を思い出す。この辺はぜひできてほしい部分か。どれもしっかり分析しようとするとおそらく正確な知識と解くための時間が必要となる。ここはあまり時間をかけずに、半分程度の正解でいいと割り切って、いかに読解問題に時間を割けるかを考えたほうが良いだろう。	やや難
II	読解問題	昨年から分量は減ったが、狙われた設問が難化している。下線部の意味を問う問題は昨年が presume, inherently, predisposition, undermine であったのに対して、今年度は protracted, espoused, panacea, disseminate である。明らかに難化している。類推もなかなか難しいのだが、5はどうにかなりそう。~fear <that Japan's expectations toward robots are simply too high> and <that robots should not be seen as a panacea for all that ails Japanese society>となっている。A and B の A と B が特に節のように内容を表す場合、両者は同じような内容となるのが基本だ。「ロボットに対する期待が高すぎる」≒「ロボットは日本社会を苦しめるすべてのものの万能薬だと見なされるべきではない」の関係となる。and は類推するための貴重な戦力となる。4の空所補充問題は「それでは十分ではないだろう」となれば逆接なので however か still を考える。どちらも副詞だが、however はコンマで挟むのが普通だが、still は文頭か一般動詞の前が基本だ。コンマで挟むのは見たことがない。社会科学部レベルとなるとこのような知識も必要となるのかもしれない。	やや難

番号	出題内容	コメント	難易度
Ⅲ	読解問題	<p>分量は昨年Ⅲより多いが、レベルは昨年並みか。下線部の意味を問う問題は相変わらず難しく、特に3は <i>enshrouded</i> に下線が引かれ、正解は e の <i>smothered</i> だ。早稲田大学といえどもさすがに下線部と正解選択肢の両方とも難語であることは珍しい。どうやって答えを出すのであろうか？ 空所補充問題もなかなか難しい。2を見ておこう。～calls for the return of <u>2</u> objects と2行下の an action plan for the return of African cultural property が少し似ている。こういうところが見えればそこから類推する手がある。<u>2</u> objects ≒ African cultural property なのだ。内容一致問題は該当箇所探し面倒だ。かなりの長文なので最初に選択肢の目立つ単語だけでも押さえておいてから読み始めるといいだろう。分析に時間がかかるころだ。正解選択肢と該当箇所を見比べてみよう。</p> <p>b. In the past, <u>certain academic disciplines</u> helped to promote the idea that African peoples were uncivilised.</p> <p>(第1段落第2文) <u>The academic disciplines of anthropology and archaeology</u>～were among the most important colonial disciplines that helped to rationalise and justify the project of European imperialism.</p> <p>長さも表現も違うが、言っていることは同じようなことだ。確認してほしい。</p>	やや難
Ⅳ	読解問題	<p>ここは分量、難易度とも昨年並みと言えそう。この大問は空所補充問題が多い。1はそもそも表現を知らない確信を持って答えることはできないのだが、後ろの that をヒントにする手がある。後ろの that は節内が完全文なので同格を表している。同格を取れる名詞はある程度決まっているので、そこから攻める手があるということ。wake-up call「警鐘」が正解。4は前文の内容がヒント。フルーツや種を食べる鳥は個体数が変わらなかったのだが、もっぱら虫を食べる鳥は90パーセント減ったという内容だ。obliterate「～を消す、全滅させる」は難単語だが、「食物網(food web も難しいのだが)が下から減ってしまっているようだ」の意味となり bottom が正解となる。最初に食べられてしまう昆虫がいなくなって、それを食べている鳥も減ってしまったようだと言っている。内容一致問題の不正解選択肢の分析も重要だ。9のdを見てみよう。</p> <p>d. <u>In tropical regions of the planet</u>, insects are able to survive and thrive across a wide range of temperatures.</p> <p>(第5段落第2文) <u>In temperate regions farther from the equator</u>, where insects can survive a wider range of temperatures～.</p> <p>temperate「温暖な」がわからないとしても、「赤道からより離れた」とあるので tropical ではないと類推できよう。当たり前だが、不正解選択肢の分析も重要だ。</p>	やや難
Ⅴ	読解問題	<p>分量は昨年並み、新型コロナウイルスがテーマなので私たちには背景知識がありそれ程読みにくくはないが、結構難単語が狙われているので昨年より解きにくそう。下線部の意味を問う問題の1は hobbling の意味を聞いているが、当然知らない語だ。前後はパンデミックのマイナス面を述べているので、ここも「経済を機能不全にしている」くらいの意味かと思い functioning improperly を選びたくなる。ただ、function は自動詞で他動詞の用法はない。早稲田大学の空所補充問題はどのように文法も意識して正解を出すようにしよう。この大問の空所補充問題は面白い。「みながマスクをしているときに耳の聞こえない人のコミュニケーション能力は失われてしまった」の「失われた」を went out the window と言うことが可能だ。</p>	やや難

番号	出題内容	コメント	難易度
V		<p>「窓の外に出た」の直訳から「失われた」の意味が出てもおかしくないという感覚が重要だ。また、「ソーシャル・ディスタンスの画一的な定義を考え直す」の「画一的な」の意味として one-size-fits-all という表現が使えるというのはある程度勘を伴うが、それぞれの単語を見れば何とか類推できそう。このような類推も結構社会科学部では重要となろう。最後の内容一致問題は1つは比較的簡単に選べるのだが、もう一つが悩ましい。問題全体を解くのにどうしても時間が足りないので、2つとも正解を選ばないといけないと思わず、サッと選んでしまうくらいの気持ちも必要なことであろう。</p>	